

森立之の生涯 5

森立之(1807～1885)

■遊相時代

森立之が失禄してからの十二年間(1837～48)は、主に相模の国で暮らしていた。当時のことが最も詳しく書かれている「遊相醫話」に頻繁に出てくる地名は、大磯、津久井、勝瀬村といった所である。

大磯・・・平塚市

津久井・・・高尾の南方、津久井湖近辺

勝瀬村・・・現在は相模湖底に沈む。ダム工事にあたって、住民は海老名市勝瀬に移住。

この遊相の時期を、立之はじつに伸び伸びと過ごしている。日々の生活の糧は、人々を治療することで得て、その他の時間は、野山・溪谷をを採薬・釣魚しつつ探索し、家内では正名学に没頭している。

1

『枳園森立之之壽藏碑』より

- 1 實事求是、發明頗る多し。又山に入りて藥を采〈採〉り、溪を下りては魚を釣る。桂川詩集有り、遊
- 2 相医話〈有り〉。其の行樂中、正名學に於いて裨益有る者は、一々筆録し、以て後放に備〈備〉え、既に
- 3 一百餘卷に及ぶ。其の他、本草經〈經〉、素、靈、四時經〈經〉、傷寒、金匱、扁鵲傳〈史記列伝中にある古代医師の伝記〉、奇
- 4 疾法、並びに放注を為す。

正名学とは、いわゆる小学のことで、中国清代に発展した文字・音韻・訓古についての学問である。これを極めることが、中国古典を研究する上での鍵になると考えて、後放の用に裨益すると思つたものは逐一筆録して、その巻数は百巻余りになったとしている。これを元に、本草経、素問、靈枢、傷寒論、金匱要略などに、すべて放注を施したとしている。もちろんこの段階では、最終的な著作として素問放注や傷寒論放注を仕上げたわけではないが、その基礎になる草稿は、この遊相時代に出来上がっていたと言える。

安政七年(1860) 正月初五夜 素問放注起業

元治元年(1864) 「素問放注」二十巻完成。

同年十一月「傷寒論放注」起業(慶応4年3月)

慶応四戊辰の年(1868)三月廿三日「傷寒論放注」卒業

作楽書屋にて書す。近日、官軍の諸卒、已にして都下に入り、四隣寂寥として、細雨は蒙昧とす。満目の春色却つて秋色の如く覚ほゆ、噫。

華一翁森立之 傷寒論放注・第三十四巻あとがき

1

■ 考証学とは

実事求是・・・事(物事)を実(究明する)し、是(ただしいもの)を求める
証明不可能な形而上学的議論を廃して、実証主義に徹した研究態度。現代科学と同様の姿勢といえる。

- この後は、森立之の実際の治療がどのようなものであつたのかを見てみたい。「遊相醫話」には、相模で実際に行つた治療について、複数が収録されているので、その中から選んでみた。子供の兔口の手術、婦人の子宮内悪血の二例、子供の傷寒による便秘の治療例である。

また、立之の師事した伊澤蘭軒の労咳論が「蘭軒醫談」に記載されているが、結核菌の発見されていなかった当時、日本の漢方医師たちが、どのようにこの病気を捉えていたのかもみたい。現代の視点からは考えられないような立論だが、決して嘲笑すべき論ではないことが分ると思う。

最後に「消渴」を患つた老婆の話が載っているが、これは奇譚として読んでみたい。



邊才醫言

是陽部ノ不時ニ腫痛スルヲ止俗カザバト
 云亦右ノ散藥酒服ニテ治ヲ得ルナリ
 大磯ノ西鄙生澤村音右衛門ノ娘樹澤ニ嫁ス此
 地ハ漁村ニテ舉家肺魚ヲ裂クヲ以テ業トス
 俗ニ云右ノアヤカリタルニヤアリケニ男兒
 ヲ産ムニ生ナカラニ免缺ナリ五月生レタ
 ルヲ六月ニ至テ治ヲ余ニ請余炎蒸ノ頂治ヲ
 誤ラニトヲ怖レ日ヲ延テ七月末ニ至ル治ヲ
 施サントスルニ此兒上唇左鼻竅中へ切レコ
 ミ齒齦モ亦斷却セリ且上唇ト齦トノ際皮肉

附著ノ指ヲ入ルノ地ナシ。因テ先鉞針ヲ以テ
 齦唇間ノ肉皮ヲ切り割り洗淨メバルサマヲ
 綿絮ニ和メ挿ミ置四五日ヲ經テ腫モヒキ上
 唇肉左右へ自在ニ動スヲ得タリ。仍テ剪刀
 ヲ以テ裂際ノ兩肉ヲ剪却シ針縫法ノ如クス。
 直ニ乳ヲ與ルニ能ク吮ス。四日ヲ經テ肉全ク
 附著スル故絲ヲヌキ去ル。僅ニ二針ニノ能合
 スコレハ嬰兒ノ無智ナル故ニ治レ易キナリ。
 大人ニ至テハ麻藥ヲ服セシメテ後治ヲ施ス
 へシ

生目醫言

藥 版
 25
 齒齦

(27)

ナケレハ往往治ヲ誤ルナリ
 奈良本儀助ノ妻年三十餘寒熱往來腹痛甚シ醫
 傷寒又ハ血熱ト爲シ治スレトモ効ナク七月
 未ヨリ荏苒十月ニ至ル。余ヲ引テ治ヲ乞フ其
 證飲食ニ畢テ即吐ス藥汁モ亦吐ス小腹塊アリ
 リテ突起ス六月以上ノ妊ニ似タリ。經水或來
 或不來不調ナリシガ此二三月ハ絶テ不來唇
 舌常ノ如シ余曰コレ血塊ナリト遂ニ桃核承
 氣湯ヲ用ルル凡二十貼許前陰ヨリ血塊ヲ下
 ス大サ手毬ノ如キモノ三枚續テ吐モ止ミ食

妊娠の月
はどの腹が太る

妊娠の月
はどの腹が太る

生品皆否

上二

現相横道ノ孫左衛門ノ妻年四十餘不食十餘日
大熱大渴多ク冷水ヲ喫ス但舌ニ胎ナク精神
言語常ニ異ルルナシ小腹大塊アリテ妊娠ノ
如シ之ヲ按スニ痛苦ヲ覺フ前醫傷寒トナシ
柴胡白虎ノ類ヲ連進スルニ寸効ナシ余亦前
證ト同シキニヨリ桃核承氣湯ヲ用ルル五貼其
夜敗血三四塊ヲ前陰ヨリ下シ諸證平ラカニ
爾後陸續悪露ヲ下スル半月許ニ全愈ニ古
方ノ妙意表ニ出ルルハ運用應機自得ノ上ニ

(28)

与瀨横道ノ孫左衛門ノ妻年四十餘不食十餘日
大熱大渴多ク冷水ヲ喫ス但舌ニ胎ナク精神
言語常ニ異ルルナシ小腹大塊アリテ妊娠ノ
如シ之ヲ按スニ痛苦ヲ覺フ前醫傷寒トナシ
柴胡白虎ノ類ヲ連進スルニ寸効ナシ余亦前
證ト同シキニヨリ桃核承氣湯ヲ用ルル五貼其
夜敗血三四塊ヲ前陰ヨリ下シ諸證平ラカニ
爾後陸續悪露ヲ下スル半月許ニ全愈ニ古
方ノ妙意表ニ出ルルハ運用應機自得ノ上ニ

鏡の
鏡の

29

傷寒論
少陰病
脈微細

失下大便

在ルナリ

篠原善右衛門ノ男兒十一歳傷寒、不大便十日許、
飲食不下、困睡不語、舌胎淡白微渴アリ。綿揆死
ニ瀕ス。前醫參附ノ類ヲ用ルニ寸効ナク治ヲ
余ニ乞フ。余脈ヲ診スルニ沉數ニメカアリ、心
下ヨリ臍腹左傍ヘカケテ堅實甚シ。全ク少陽
陽明ノ證、失下經曰故ニ如此。不食困睡共ニ虵
ノ所爲ナラント思ヒ大柴胡湯ニ鷓鴣菜ヲ加
三匙ヲ投ス午前ヨリ用ヒ未時大便一行戌時
アテニ凡三行虵二條ヲ下ス。曉天稀粥ヲ喫ス

リヤ

誤殺

條全

カ、コガ
コ、コガ
カ、コガ

203 遊相医話

生目醫書

し

大便

辺村醫言

し

爾後大小柴胡ヲ錯用シ始終鷓鴣菜ヲ加テ全
功ヲ得タリ

30

八丈嶋ノ婦人受胎スル時ハ臍上ニ布帶ヲ緊束
シ見ラシテ肥大ナラシメス。食物常ノ如ク魚
鰕ノ類少シモ禁スルナク勞體力作平日ニ
加倍ス。分娩ノ後ハ凡膏油ノ類ヲ禁シ起居亦
平穩ナラシム。全嶋從來難生ノ患アルヲ聞
カスト八丈嶋ノ人山下平治平御船頭ノ話ナ
リ

カ、コガ
カ、コガ
陰虛内熱

31

中風骨蒸梅毒癩疥ノ四病ハ古今ノ難治トスル

小冊車言
 言ノ輩各一家シカシ其意ハ古方ニモアル
 言ヲ出セリ
 一ニテ文面ニ顯ハニ云ハヌノミ病澄ト
 主方ニ眼ヲ著ケテ見レハ其病因ハ自ラ
 知ルベシ然レハ古書ヲ熟讀シテ見解ヲ
 定メ其古方ノ意味ヲ失ハサルヤウニス
 レハ治法ノ上テハ新シキ上ニモ新シク
 エ夫スベシコレ余此語ヲ以テ醫家ノ一
 大金言トスル所以ナリ
 金匱ニ所云虚勞ハ素問ノ勞心破血本草

衍義ノ積想成勞ノ類ニテ病因ハ氣血ヲ
 損傷セシモノナリエハニ參蓂ノ類ヲ用
 エ又婦人ノ血澄ニ甚勞ニ似タルアリキ
 金方宋臣凡例ニ指帶下為勞疾トイヘル
 是也亦虚勞ノ類澄ナリ
 今ノ俗勞歎ト云フモノハ金匱ノ肺痿ノ
 類ナリエハニ張子和ハ痿澄トノミ云ヘ
 リ此ウチニ一種難治ノ澄アリ極メテ胎
 毒ナルベシ此毒ハ朱葵ノ所云先天ノ遺

毒ナリ痘科健胎毒ソノ痘ニ茲ニ盡サ、
 ルノ遺毒一點ノ火ノ如キモノ骨髄カ臑
 膜カ腸胃カニ伏潜スル有テ思慮籌詰ニ
 因テ漸ニ成長メ勞ヲナスナリ此說新奇
 ニ似タレド然ラズ既ニ古人モ傳テ殫殫
 ナド云テ子ニ傳ヘ孫ニ傳ルト云ヘルニ
 基テカクハ云フナリ且古人ノ用藥ヲ見
 ルニ阿魏癩肝ノ類皆破血ノ最ナルモノ
 ナリ其一等柔順ナル劑ハ犀角天靈蓋大

五月十七日朝

黃蠶蟲ノ類ナリコレニ撮テ病因ハ必血
 分胎毒沈痼ノ疾ニ厲スルヲ知ナリ
 四花患門ノ灸ハ本崔知悌ノ法ニテ隋志
 ニ崔知悌治勞灸法一卷アリ是ナリ爾後
 外臺秘要蘇沈良方田春入門ナド皆其法
 ナリ傳ノ陳無擇ハ未發ノ前ニ四花ヲ灸ス
 ルハ可否相半スルヲ聞ト云ヘ中蓋自驗
 セザルノ言ナリ畢竟此灸ハ真ノ虛勞ヲ
 治スルノ法ナリ故ニ骨蒸熱ノ證ニハ用

三

ルナリ灌水シテ陽氣ヲ劫カシ出シテ愈
ルコトアリト理或ハ然ラシ

アル田家ノ一老婆消渴ヲ病ム水飮甚多
シテ大小便共ニ閉テ渾身水腫シテ百治
効ナシ煩悶將死或人ノ青カヘルヲ生ニ
テ食ヌバ必愈ルヨシヌ、ムレド活物ヲ
食ノニ忍ビズトテ只服藥ノミニテアリ
シニ一タ煩渴更ニ甚シ因テ看病人ノ眠
ルヲ伺テヤウマウ匍匐シテ手桶ノ水ヲ

飲ントセシニ通桶ノ窟ハ子テ水一滴モ
ナシ遠ニ庭上ニ水音アルヲ聞キ又ソロ
ソロト匍匐シテ遂ニ窺ノ下ニ至リ手ヲ
掬シテ先飲ムニ口中ニ何かサハルモノ
アリシト思ヒナガラ大渴ノアマリニ吞
下シテケリ再ヒ手ヲ掬シテ水ヲウケシ
ニ又手中ニ物アリト覺ヘシユヘ折節月
光晝ノ如クナリケレバコレヲ熟視スル
ニ一ツノ青カヘルナリコレゾ天ノ與ヘ

世

ト蒸テ飲メトス、メン人ノ有シヲ思出
 シテ又コレヲ吞ム又掬スルニ又得タリ
 九テ青蛙三枚ヲ吞タリサテ漸病牀ヘ行
 ントセシニ家ニ入ラザルヲテニ卒カニ
 兩便トモニ大ニ利シ忽爽快ヲ覺テ水腫
 頓ニ減シ續テ下利數行ヲ得テ漸ニ平復
 セリコレ一大奇事ト思ヒシニ謹治要訣
 ニ九渾身水腫或單腹脹者以青蠶一二枚
 去皮炙食之則自消也ト云ハリ其後此證

ニ遇ハ試ント思トモ未及ハス

一老翁性潔癖ニテ常掃除ノミヲ業ト為
 ス一婦アリ外ヨリ來テ客タリ此婦百痛
 ヲ苦クヨシ語ケレバ夫ニコレノ妙藥アリ
 授スヘシト云サニ析フシ火桶ノ灰ノ塊
 ヲ拾ヒ出シタルガ紙ニ包テアリケレバ
 コレヲバ捨サスル心ニテ彼ニ與フルニ
 彼婦ハコレゾ藥ナリト心得ソレヨリ宅
 へ歸リ一包ヲ傳ケテラサルニ百痛ハ全

廿七